哲學研究
第三百八十四號　第三十三卷第三冊

自傳の一節
―遺稿―

小西重直

運命は躍動す

二度も三度も戰災に罹つた人もあれば、南方の戰場で、可愛い獨り子を失つた親もある。頼みとする夫は戰死し、數人の遺兒を抱えて生活の再建に立ち上つている氣丈な婦人もある。大坊の近親にも、大阪の郊外に住んでいて、會社への出勤間際に爆彈に見舞われ、家と諸共にこつぱ微塵になつた夫婦ものがある。一度も戰災を蒙らず、出征した子供達も無事に歸還したような幸福な家庭もある。一緒に相並んで敵と戰い、戰友は手榴彈に倒れたが、自分は奇蹟的に微傷だも負はない幸運な人もある。今度の戰爭に於ては、人間の生涯は實に運命が八分、場合によつては、全部が運命に支配されるような感じをさへ起させる材料が頗る多い。

人の運命は、前世から何ものかに支配されて、人間の自由意志による行動は全く無力なもので、人の幸不幸も、國の盛衰も、元來豫定されているものであるというような極端な宿命觀は未開人の間などに見られる。

希臘の神話に見えるモイラという運命に對しては、人も神も無力であつた。ローマに於ても運命卽ちファトムは幸福の神などと相並んで崇拜されたものである。佛教の所謂因果應報は運命の盲目的な必至を打開し、實踐的努力によ

つて不幸な運命を克服するように道德化したものであるが、個人の現實の行動のみを基準としないで、宿業的因緣をも認めているから、或る程度まで、豫定的の宿命をも意味するものとも見られる。儒敎に於ては、運命は天の意志であつて、人の幸不幸は天意に出づると說かれているが、併し人間の自由意志の行動を否定しては居らない。寧ろ之を肯定して、出來るだけ人事を盡すべき事を勸說し、人事を盡して然る後天命を俟つように道德生活の樹立を高唱した。

大坊の知つている一人の青年が、勉强のために、田舍から東京に出て來た。下宿が見つからないので困つた。たまたま淺草の觀音樣に參詣した。其の途中、十數年前に別れた小學時代の親しい友達に出逢つた。下宿に困つていることを話すと、僕は今淺草の藥店に厄介になつて居る。同縣の人であるから、何か便宜があるかもしれない。一緒に一寸行つて見ないかといはれるままに、其の店主を訪ねた。店主は青年の姓名を聞き、あなたは誰れそれの御子さんでないか。十數年前、自分は出京する路に、あなたの父親から非常な御世話になつたものだ。あなたの下宿が見つかるまで、何日でも私の家に泊つて居つて貰いたいと懇懃に待遇された。青年は不思議な因緣に驚き、其の厚意を感謝しながら、下宿のきまるまで此の家に厄介になつたのである。青年は其の父親の陰德のために一時の急場を救はれたのであるが、此の青年を店主に引き合わした力は何であるか、無論これは偶然に出逢つた小學時代の友達である。誰れが、此の友達と青年とが出逢うようにしたのであろうか。全くの偶然か。前世からの豫定的な因緣か。敬虔心に篤い至誠眞實の此の青年に對する觀音樣の靈驗か。

道理の上から言えば、善賢の人は福を得、兇惡の人は禍を招くべきであるが、世間の事實として、善賢の人が不幸となり、兇惡のものが劫つて福を得るようなことが往々あるのである。これは善賢と目される人が、其の心に於て伸々剛のものがあり、自矜の精神が强いか、又は所謂高い位に居るか、名譽が餘りにも顯はれ過ぎるかである。物が盈滿の狀態になれば必ず缺けるようになるのが自然の必然の命數である。善賢の人でも餘りに盈滿の高潮に達すれば減退下降缺損という不幸の狀態になるのである。これを避けるためには盈滿な高潮に達せぬように謙讓の實を示さねば

ならない。又凶悪なものと呼されるもので而も却つて幸福な生活に恵まれるものは何故であるか。此の人は必ずや、其の心に柔か味があつて、從順なる點もあるか、生活に於て儉素節度があるか、又は能く人に物を施すこともあるからである。言い換えれば盈滿な狀態に居らないで、むしろ缺損の狀態に居るのであるから、幾分でも盈滿の狀態に近づくことが出來る命數にあるのである。生あるものは必ず死すという命數をもち、滿つるものは必ず缺けるという命數をもつている。虛なるものは實有となり、無なるものは有に進み得るということが必至の命數である。これは大儒廣瀨淡窓先生の名著析玄三十則の中に說かれてあることである。併し實際の事實としては盈滿な狀態に居らないで、むしろ不遇な境遇に居る人が益と不幸に陷ることが頗る多く、盈滿の狀態に居ると思はれる家が、一代も二代も幸福な生活を續けることがある。富を有する人が能くこれを社會のために散ずれば、缺くれば滿つるの命數によつて却つてまた幸福となることも出來るであろう。盈滿や缺損の說明のみでは幸不幸の運命全體を解釋することも出來ぬが、これも一つの參考として味うべきであると思う。

天地間の複雜微妙な現象、人間社會に於ける潛在的な事情、人間の心身の靈妙な作用などが仔細に科學的に研究されるなら、運命と考えられているものは、合理的に因果關係があるもので、決して盲目的な豫定必然のものでもなく、又決して一時の偶然的なものでもないことが分るであろう。併し固よりこれは決して容易なことではない。結局は平凡な結論ではあるが、人事を盡して天命を俟つより外はない。運命は、多くの場合、俄かに變發するものではない。人事を盡しつつある間に、潛在的に躍動しつつあるのである。運命は躍動す。これが大坊の運命觀の骨子である。人事の盡し方にも色々ある。人間の尊嚴を保證し、責任を感ぜしめる所の自由意志的な行動が出來るだけ立派なものにならねばならない。教養を豐かに又深めることによつて、仕事の能率を高め、仕事の仕方によつて教養を積み、人事の極限を盡して前進する所に幸福があるのである。成果が幸福ならば一層の幸福であるが、成果が左程幸福と思はれなくとも、夫れが次の段階へ進む階梯であると諦念して前進また前進である。陽光は雲を破つて粲然として

輝いてくる。

岡田富士と大坊行路の方針

大坊が其の自敍傳の前編として書き綴つた「感謝の生涯」に於て詳述した中學時代の恩師岡田五鬼先生は大坊の生涯の大方針を決定した。

大坊は中學の四年の時に、前途の方針を色々と考えた。福澤先生の慶應義塾の學則などを取り寄せて、其處で法律や經濟を學んで見ようかと思つた。中學の四年及五年で土屋先生から學んだ經濟學は非常に面白かつたが、慶應義塾出身者が實業界に於て大に活躍して居るということも知らなかつたし、また實業界のことなどについては全く興味がなかつた。法律や經濟を修めたら役人になるものと考えていたが、大坊は役人にはどうも適しそうもない。慶應義塾志望は見合せることにした。士官學校志望の友人もあつたので、學資金に乏しい大坊も一兩日考えてみた。彼は體操の號令が相當上手で、發火演習などの場合には一部隊の指揮者となつたこともある。しかしいくら官費で勉强が出來ても職業軍人となることは好まないという結論に達した。

實業界には興味がない。役人に適しない。軍人にもなりたくはない。自ら何か事業を計畫するだけの力もなく見識もない。迷いに迷つた。野原を獨りで散歩したり、麥畑に飛んでくる雲雀などを無心にながめて心の懊惱を靜めようとしたが、いつまでも糸の切れた風船玉で居る譯には行かない。眞面目に沈思し默考した。默考し沈思した。

汝の行く途は岡田先生の生活だ。教育というものをやつて見よとの天命天意に動かされた。青年の師父としての岡田先生。この先生の生活こそ實に幸福共のものであろう。岡田先生を富士山の絶頂とすれば、自分は二合目か三合目でヘタバルことは分りきつて居るが、兎も角岡田富士を目指して進んで見ようと決心するに至つた。二、三の動物仲間の親友も贊成して呉れた。思い切つて岡田先生に意中を洩らして見た。先生は苦笑されたが、幸に贊意を表された。大坊の生涯の大方針が愈〻確定したのである。

運命の辯證法的躍動展開

一　入學試驗の失敗

人を教育するには先ず自分を教育せねばならない。自分の教養の結果が自然ににじみ出でて夫れが人を教育することにならねばならない。自分の教育は一生涯の間續けねばならないが、先ず以て學校に於て出來るだけ高く深く廣い教養を積む必要がある。大坊は高等學校に入つて大學まで進んで見たいというので、中學四年の時に、仙臺の第二高等中學の豫科一年への入學試驗を受けた。數學、英語、漢文の試驗科目であつた。大坊は數學が餘り得手でないので、試驗の結果は、豫科一年の一年下級である補充科二年ならば入學を許可するという通知に接した。當時二高は補充科一二年、豫科一二三年、本科一二年で、全體を通じて七年の課程であつた。そして東北地方の中學卒業生で優等のものは無試驗で豫科一年への入學を許すことになつていた。大坊は學資金の都合もあるので、補充科二年への入學を斷り、中學を卒業して、無試驗で豫科一年へ入つてやろうと決心し、其の儘中學に於て勉強することにした。

中學を卒業する間際になつたら、父の病氣のため、元來不如意な家政が一層苦境に陷り月々の月謝さへも期限内に納めることが出來なくなつた。卒業後上級學校へ進學する見込が立たず、青年大坊の前途は全く暗くなつて來た。

大坊の運命は實に不思議である。悪魔が道を塞げば、天使が飛んで來て道を開いて呉れる。闇から明るさへと躍動する。東京高等師範學校では、これまで、地方の師範卒業生のみに入學を許していたが、明治二十七年卽ち大坊が中學を卒業せる年から初めて中學卒業生にも其の門戸を開くことになつた。岡田先生や其の他の先生から、教育界に入るというなら、高師は其の專門學校であり、官費であるから、是非高師の入試を受けて見よと勸誘された。動物群の中で神馬であつた秋山角彌も一緒に受驗することになつた。突然のことで全く準備はない。高師ということであれば、教育學や心理學などの試驗もあるであろうというので、秋山と共に能勢榮氏の教育學やベーンの心理學の譯書などを學校の圖書室で讀んで見たが仲々六かしいので理解が出來ない。心理學の中にある觀念などという言葉の意味さ

へも全く分らない。モー駄目だ。受驗するだけの學力がない。今年は斷念し、一年の間シッカリ準備して來年受驗しようと先生達に相談した。先生達も多少無理とは思はれたが、しかし今年は駄目なものと思つて、樣子を見る積りでやつて見るがよい。落第しても中學の恥にはならない。其の點は心配するなと激勵された。二人は心を取り直し、運を天に任かせて、中學所在地の郡山から福島へ行き、縣廳の一室で試驗を受けた。師範からは落合寅平氏と加納某の二人が受驗した。

第一日目の試驗は、作文と英語である。この作文が鬼門だ。教育學や心理學の知識を試驗するに違ひないと、ビクビクして問題を見ると、高師入學希望の理由を書けという問題だ。然るべく二三枚書き綴つて、先ず〳〵自分免許の合格と胸を撫でおろした。次ぎは英語の試驗だ。大坊は英語が得意であつたから、殆んど滿點と思われる程の上出來であつた。秋山も半分以上やつてぬけた。明日は漢文だ。漢文は二人共御自慢の學科だ。モーしめた。入學確定だ。前祝だというので、福島で名高い伊勢銀というそば屋へ行つて、何でも一番うまいものを持つてこいと上段構へで註文した。生れて初めて、かもなんばんとかいうすばらしいものを味つて舌鼓を打つた。其の夜は明日の漢文何ものぞと、數日間の緊張が一時にゆるんで、グッスリと寢込んだ。

二日目の朝、天氣晴朗、遙か向うの西北に聳える吾妻の高峯には春の殘雪が朝日に照らされ、柔かな光を反射して、二人の門出を祝つて呉れるようである。落ちついて試驗場に入つた。悠然として問題の配布をまつた。油斷大敵、豫想に反した强敵に出逢つた。血は逆上して來た。始から終りまで、全く讀むことも出來ず、意味などは勿論分らない。試驗官は、讀書百遍意自ら通ずであるから、何遍でも繰り返して讀んで見るがよいと親切に勵まして呉れた。意味どころの騒ぎではない。一遍でも讀むことが出來ない。唯だジット文字を見詰めるばかりである。それこそ眼光紙背に徹せよとばかり文字を睨らみつけて見たが、全くきめがない。落合加納の兩君はしきりに筆を走らして居る。大坊と秋山は、鉛筆を握つたまま、不動の姿勢である。孟子からの簡單な一句だけを完全に解釋したが、主要

な問題は遂に白紙の答案となつてしまつた。悄然として試驗場から出た二人は、互に交はす言葉もなく、唯だ悲憤の涙を見たり見せたりするのみであつた。

中學へ歸つて、漢文の問題を先生に示した。これは左傳の中の詩の句である。出來なかつたのは無理はない。失望するなと慰められた。會津の日新館や今泉先生の漢學塾や、中學での漢文で、日本外史、十八史略、大學、中庸、論語、孟子、文章軌範、蒙求、莊子、史記などを學び、漢文が得意で御手のものとうぬぼれていた大坊も遂に左傳の强敵に出逢つて慘敗してしまつた。聞けば、これまでの入試問題には毎年左傳からのものがあつたということであるが、大坊も秋山もそんな豫備知識をもつてはいなかつた。師範の落合氏は文科に、加納氏は理科にそれぞれ芽出度合格された。加納氏は不幸にして早く世を去り、落合氏は名高い立派な教育家となられ、青年教育の大功勞者であることは人の知る所である。一緒に受驗した緣故で、大坊は永く落合氏と親親を結び得たことを感謝して居る。

二　前途の光明

秋山は、尊信する先輩の勸めにより、方向を轉じて、國學院に入學した。彼は實に其の所を得たのである。生涯國文や和歌に親しみ、青年の師父として大に教育にも盡す所があつた。

大坊は翌年再度の入試を目當てに頑張つた。左傳の註釋本などを購入して、この强敵の征服に熱中した。果然、六月頃に、大坊の運命は轉回して、前途は光明に照らされた。それは舊藩主上杉伯の厚意から成る米澤教育會から學費の給費を許可するといふ吉報であつた。ここで恩師山崎新太郎先生について述べねばならない。

大坊が中學五年生の時に、山崎新太郎先生が來任された。大坊の生れ故郷米澤出身の御方であるというので、時々遊びに行き、貧乏中學生には勿體ない程の御馳走になつたこともある。先生は慶應義塾の出身で、米澤中學の學監たりしこともあり、明治、大正、昭和の時代に於て、各方面に活躍せる米澤出身の名士は大抵此の先生の薫陶を受けて居るので、米澤では大先達大先輩である。先生は五ヶ年の間米國に留學し、歸朝後は一時東京高師の講師を勤め、明

治二十六年、卽ち大坊の五年生の時に、福島縣尋常中學校（後の安積中學校――現在の安積高等學校）の首席として來任された。夙に品川彌次郎氏に知られて居り、米國から歸朝の後は、社會的に相當高い地位に就かれる筈であつたが、色々の事情で、田舍の中學の動物達を相手にせねばならないことになつた。先生自身は別に野心がある譯でもなく、青年愛の敎育第一義といふ堅い信念のもとに、高邁な識見とねばり强い氣力とを以て腕白小僧の敎育に餘念がなかつた。漢學の造詣が深く、獨逸語を能くし、殊に英文學の大家であり、漢詩を作り、能書家でもある。大坊達は五年生の時に、岡田先生からマコーレーのミルトンを、山崎先生からスキトンの英文學や英語の自由會話などを學んだ。此の頃は全校の生徒は約百五十人で、五年生は僅かに十七名であつた。

山崎先生は、其の後安積中學の校長となられたが、大坊が赤門の三年生で、卒業論文の作製でテンテコ舞をしている時に、偶々校長會議で上京され、神田の旅館で肺炎に罹られた。大坊は先生の入京を耳にし、直ちに其の旅館を訪ねた所が、先生は非常な高熱で苦しんで居られる。大坊は駿河臺の杏雲堂病院にかけつけて醫師の來診を願つた。肺炎と決定し、直ちに入院となつた。當時先生の奥樣は姙娠中で而も臨月である。先生の大病を知らせる譯にも行かない。大坊は學校を休んで、數日の間日夜看病に手を盡した。五日目頃に、院長は多少險惡の兆候もあるから、近親を呼び寄せろと注意された。當時横須賀に住んで居る先生の實弟に打電した。翌日其の令閨が急いで入京された。天祐だ。七日目に體溫が急に下つた。院長の大丈夫という力强い一言で、一同愁眉を開いた。大切な先生の一身を引き受けたような大責任を感じていた大坊は此の時位重荷をおろした安神な氣持を體驗した事はない。幸に卒業試驗も何んとかやつてぬけたが、圖らずも恩賜銀時計を拜受する光榮に浴した。大坊の試驗の事を非常に氣にやんで居られた山崎先生は、此の時位自分の喜びが高潮に達した事がないと話された。誠に勿體ない事である。先生は恢復後は、暖かな地方に轉ずるがよいとの醫師の注意もあつたので、豐橋の中學校長に轉任された。ここで二十有餘年の間熱心に青年の敎育に當り、先年七十餘歲で亡くなられた。この地方の漢文の記念碑などは多く先生の筆に成るものである。

先生は大坊が學資の都合上、高等中學の入學を斷念せることを氣の毒に思はれた。前記上杉伯の篤志から成立して居る米澤教育會に對し、大坊のために學資を貸與して呉れと依頼され、尙ほ當時一高に在學せる宇佐美大助兄をして、大坊のことについて係りの人に直接依頼せしめられた。

宇佐美大助兄は後改名して、宇佐美勝夫となつた。至誠直實外柔內剛、常に人のために盡くして、生涯奉仕の生活を送つた。朝鮮總督府の內務部長官として立派な業績を擧げ、關東震災の時には、東京府知事として復興のために活動し、滿洲政府の最高顧問や資源局の長官などを勤め、其の後は貴族院議員として國政に參與し、鄕里米澤の先輩として、鄕里の福祉、青年の教育のために力を盡くし、先年七十四歲で亡くなつた。大坊と宇佐美兄とは親族としては遠緣であるが、鄕里に於ては、宇佐美家は大坊の母の實家の直ぐ近くにあつたので、日夕互に往來し、大助兄は殊に大坊の母と非常な仲良しで、大坊の母は我が子のように大助兄と親んでいたのである。

山崎先生や大助兄の盡力で、大坊に毎月四圓の學資貸與が許可された。當時は仙臺邊では、貧乏學生の下宿は月に三圓五十錢位、授業料は二圓、小使錢二圓位で、一ケ月七八圓もあればどうにかこうにかやつて行けたのである。大坊の父も三四圓なら送金が出來るというので、大坊は愈、素志を貫徹して仙臺の二高に入學することが出來た。當時學校の組織が變更され、補充科は廢止となり、舊豫科一年と本科三年という四年制になつて居り、大坊は無試驗で舊豫科へ入學を許されたのである。二高には別に醫學部が併置され、附屬病院もあり、相當大きな規模の學園であつた。

大坊の生涯は實に感謝の生涯である。乳兒の場合には、母と共に深淵に沈むべき運命のものが神佛の手によつて救われ、一家離散の際には、御寺の小僧か、呉服屋の丁稚になるべきものが母の實家に引き取られ、其の後米澤から會津へ運れて行かれ、名高い日新館で勉强を續け得ることになつた。十三歲の時に、榎本子爵の玄關番になろうとして無斷家出をなし、途中でつかまり、其の御陰で中學に入學することが出來た。而も入試後二ケ月も後れて入學を無理矢鱈に懇請し、和田校長の英斷によつて參觀生として入學することを許された。東京高師の入試が不合格となつた

が、今は宿願の通り二高に入學することが出來た。大坊の運命は一方には常に失敗落魄、嵐の中に吹き廻される木の葉のようであるが、思いがけなく急に春陽來復の福音に惠まれる。後を見れば暗闇に包まれているが、前途は光明に照らされる。二高の入學もまた大坊の前途を深く意味づけるもので、運命の辯證法的躍動展開に對し、感謝の太息が腹の底から響いて來るのである。

小西重直博士略歷

明治八・一・一五　出生、本籍福島縣南會津郡田島町大字田島字東町
〃　二七・三　福島縣常中學校卒業
〃　三一・七　第二高等學校卒業
〃　三四・七　東京帝國大學文科大學哲學科卒業
〃　三四・九　教育學研究のため獨英兩國へ留學
〃　三八・五　歸朝
〃　三八・六・一八　廣島高等師範學校教授
〃　四三・七・二三　文部省視學官
大正元・九・二〇　第七高等學校造士館長兼教授
〃　二・八・四　京都帝國大學文科大學教授教育學教授法講座擔任
〃　二・一二・二六　文學博士
大正四・七・八　支那及びウラジオストックへ出張
〃　一〇・八・四　歐米各國へ出張
〃　一一・七・八　歸學
〃　一三・一・二四　京都帝國大學評議員
昭和二・四・五　京都帝國大學文學部長
〃　四・四・一　退官
〃　八・三・二二　京都帝國大學總長
〃　八・六・三〇　退職
〃　八・一一・二八　名譽教授
〃　二三・七・二一　逝去